

雑詠日記

海蝶夢話

卷の二

二〇〇七年

市井一人

転機に立ってあわただしくさまざまなことに出会った今年、手にした本の中に古井由吉の二冊の本『詩への小路』と『始まりの言葉』があった。その一節に言う、

「思う」の内には、言語にならぬ混沌から内なる音声へ、音声から言葉へ、そして意味へと、言語の長大な発生史が、瞬時のうちにふくまれる。混沌の淵からはじめの言葉を待つという、尖鋭な詩人たちの冒険にほとんどひとしいことを、常人もまた、物を言うたびに、いや、物を思うたびに、やっている。

生と死のあわい、人間の身体をしみ出す魂を把えて語ろうとする不思議な文体に会うのは二度目だ。ドイツ語からギリシア語まで読み解いて詩を受けとめようとしている。詩を味わうには大変な努力が要るのだ。その培った力量で読み取り、自分の文体に表現する力技は誰にもできることではない。まことに詩を読むことはむつかしい。そして、わたしの雑詠を書きとめる営みは容易と言える。

一月一日 おだやかな海を曙光へ飛ぶ鷗

一月三日 月満ちて今年も同じ三日月

時がわたしの中に何事も刻まずに過ぎていく。  
身心を落ち着かせて動かなければならない。  
わたしが時のリズムと歩くように。

一月十五日 小寒に手足縮めるカマドウマ

仙境の龍のひげにも霜降りる

耕して霜降りた畑種子を待つ

一月十八日 教育を窒息させて権力が社会をゆがめ衰微の道へ

大きくもまた小さくも状況と対決をして我が道選ぶ

一月十九日 寒の夜伊能の熱意渴仰す

一月二十二日

この国の学びの磁場を破壊して進む荒唐愚かな者よ

一月二十六日

冬の雷節目の授業終えて聞く

粛々と節目の春を見据え行く

一月二十九日

投企して雪になれずに散る空華

果てしない夢を追う蝶倦まず飛べ

一月三十日

霜の畑さくりと踏んで学校へ

二月一日

些事終えて日を消尽し身は老いる

二月二日

心はずむあるかなしに積もる雪

数片の雪わたくしに舞いかかる

もろともに鬼閉じ込める雪しきり

二月五日

門に立ち隣家の梅に季節知る

片付けに日々を追われて季はめぐる赤紫に暮れる山の端

二月七日

不正義に対し乾燥無花果を食べて養うこの志

春雨に彼我敵としてあるを知る

春耕に皮袋を破る病持つ深く耕せ治癒はここから

二月九日

身体に脳の網目が仮構するものこそ果実妙なる空華

二月十日

しなやかに花は揺られて春を知る

二月十四日

春一番風の大きな息遣い

「君もまた木や藪と異なつた何者だろうか。芽生えて、花咲き、君も枯れ  
ていく」  
T・シュトルムという十九世紀のドイツ詩人

二月二十七日

グラウンドに春、青年が駆けている

三月一日

一人して菜の花が立つ霜の野辺

## 「海図もない大海原へ」

小さな帆をもつて海を渡ろうとする者よ

帆船も動かぬ風の海に

あるいは大船が翻弄される嵐の海に

わずかな翹で空気を打つ者よ

何物も見えぬ大海原にあつて

動いたつもりが、ただ同じ水平線を見て

焦燥しているのか、それとももう動じなくなつたか

ただ夜々の星辰を見て季節の移ろいを測れ

気づいたら海図のない大海にいることを知った者よ

そこを渡ることが生きることだったと知ったか

夢を天地の間の空虚に描こうとする者よ

そうすることで渡海の営みを續けているのか

思索の力を持つ者だけがそうするように

ささやかながら構想する者だけが

何物も見えぬ大海を乗りきることができる

果てしがないということにもちこたえることができる

今日海を、そして明日も海で  
小さな翅を打て。

三月四日

鞦韆で春風に乗るひと時よ

三月八日

労働を終えて春風去るを待つ

三月十七日

受記も無く老境へ発つ、余寒あり

去く者は四季のめぐりと歩を合わす

業終えてまた業を為す業ごうの者意は消えやらず色界めぐる

野に出でて蓬摘む頃時を経る

三月二十一日

菜の花の畑に風船ふうわりと

牡蠣開けて春の潮の音を聞く

寄す波に彼岸を望む夫婦岩

三月二十二日

南の島から大洋の息吹が運ばれて  
心を洗った

今日の日に花を添えた励ましに  
また風となつて

山と海とを逡巡ろう

三月二十五日

木も草も花開く時生き急ぐことを慎み花に佇む

五里霧中機中に春の夢を見ずただ虚心得て迎える転機

三月二十九日

「犀のように」

わたしは 自己を

ともし火とすることができるか

ともし火となるほど 努め

励む者であるか

いずれにしても 人は

みずからを 見つめながら



四月七日

未知へ向かつて  
足を踏み出すことだけができる

「無音の旋律」

覚めている蝶は  
みずからが何者であるか  
その条件を知りながら  
小さな翅で  
空気にはばたく  
奇跡を為す  
そして時空に  
軌跡をつくり出す

はらはらと花散る道を、  
老幼が手を取りあつて、  
時を手づから渡すよう、  
花が地面に落ちるまで、  
蜂が宙に動かない、  
風はたしかに流れているが。

四月十四日

退職の挨拶状を投函し新緑萌える南山仰ぐ

四月十六日

アルツハイマー末期の母の検診で待合室に過ぎて行く時

旅立ちを前に孫乗る三輪車押す雨上がり葉桜の道

四月十七日

老年にいつしか至りよく生きることを目指して海を越え行く

中国瀋陽に来了。

四月二十二日

窓の外柳並木の新緑を見る教室の教卓に立つ

世紀路に萌える柳のかすむ先

四月二十八日

花々は移ろいやすく柳花散る

花と人短い春の恵み得る

五月十六日

柳絮飛び五星紅旗の空かすむ

五月十九日

緑江の虎山塞上風薫る

アカシアの並木のかなた果て無き野

五月二十三日

滋雨降つて柳樹はさらに緑増す

五月二十六日

昭陵の初夏の空には鯉の風

(鯉幟の図柄)

時ゆるやか緑陰の卓牌の音

引退し我が時を得て善男女池亭に歌う声のびやかに

五月二十八日

猫歩く渾南新区野花咲く

地平から雷神が来る大きな国

六月四日

花桃の実に胡蝶いて夷人見る

六月七日

緑陰を求め百八段上る

燕飛ぶ帝陵の屋根色あせる  
(古代燕に属していた地)

蒲公英についてヌルハチ惚ぶ蝶

シマリスが松林衛る太祖陵

帝陵の桑の実を採る旅客あり

英雄は眠る三百五十年乾く夏にも草結ぶ屋根

六月九日

沼沢の続く遼河の夏を行く

陽かげろう葦原を行く風探す

汗ぬぐい羽根得た者の化石見る  
(羽根を得た恐竜)

乾く地に一億年も前の木と渴仰し立つ人身を得て

北票市四合屯古生物化石展覽館そばの発掘跡の礫岩の破片を拾って  
割っているうちに、草の葉の化石が合わせ鏡になって出てきた。朝陽

市で売っている化石の飾り物のように、小さな額に入れてみようと思  
い、賛を考えた。

「海蝶再会往古野草」

草生石中一億歳  
生命変遷兆京類  
古水乾尽燕地夏  
人身偶覺幾許睡

六月十二日

満州に源氏平氏の蜚見ず

六月十五日

六月に雨見ぬ国の回廊で夕陽を浴びて抹茶を点てる

六月十九日

白楊がたわむれ笑う夏の風

中国の香り粽のひもを解く

六月二十一日

縊り糸を手首に巻いた女学生解き放つ時まだ来ぬと言う

「世界へと身を挺している主体」M・メルロー＝ポンティ『知覚の現象学』

七月一日

七月の雨身体と和諧する

夏の宵二胡の音湿る雨多少

七月六日

一人居て爪切る夏の異国の夜

七月十一日

土ぼこりの多い国で

部屋の中に植物を育てる男が

一つ一つの小鉢の草花の葉の

ほこりをやさしく除いて水を遣る。

その顔が頬笑み

葉がまだかすかに振動している。

太い道つけて雷神天下る満地に仮寓する者の前

七月十八日

雲下ろし芝刈る音や四声聞く

七月二十一日

遼寧省博物館参観。

夏の朝朱房の剣で舞う女

日の影で黒衣の人のかざす劍

鶏冠の下ぶくらみの土器の涼

皇帝の絵を群鶴が引き連れて故地東北に展覽させる

徽宗は金に捕らえられて遼寧省に連れてこられ、黒龍江省で死んだ。書画に親しんだ人は皇帝としてはふさわしくなかった。説明文は「無能」と言う。

七月二十七日

濟南・泰山・曲阜への旅。

大明湖蓮を見つめて老いの中

湧く水と行く時のなか廊に立つ

七月二十八日

色種々の百日紅や天の下

天界へ人送るかご絶え間なし

昼の月に萩咲き添える天の街

七月二十九日

孔林の墓碑に蟬声こだまする

白楊の中で羊を見て昼寝  
(魯・斉の道を行く)

八月五日

宋人の正気をしのぶ羈旅の夏

行く夏よ子美の言葉の湧くを待て

八月八日

盛京の花園の塀に咲く南瓜

長嘯する蒙古の人の演歌聞く

八月十日

大陸に西風吹いて帰心起つ

八月十二日

東京は猛暑の便り紫陽花の咲く盛京に秋の雨降る

灯火消え昨日の夏を呼ぶ胡弓  
(停電)

無明裏に夢のさまよう長い夜



八月十七日

「擬詩」

瀋陽青年欲渡洋

海東老生来援航

八月之查至日辺

何時再会有親交

二〇〇七年八月十七日

海蝶

と、黒板に書いて学生に別れの言葉を贈った。最後の交の韻が合わない。後で何人もの学生に、この四行二十八文字を書いてくれと頼まれた。

窓に寄り別れの擬詩を記す秋<sup>とき</sup>

八月十九日

旅順港かすんで見えず蟬の声

(二〇三高地)

草茂る観光遺物水師營

八月二十日

点心を楽しむ窓の外の合歓

(初めて豪華ホテルへ闖入して)

西施の木優美に踊る旅の果て

大連の中山広場旅終えて行き交う人を眺める夕べ

人生の旅路は果てず巡る秋

八月二十六日

浜風に吹かれ眺める百日紅旅の終わりのふるさとの家

九月十一日

ただ虫の声だけ響く夜の中

九月十七日

紅楼の夢をひもとく秋の蝶

九月二十九日

田舎家の白壁の塀飾る朱花

九月三十日

萩と海眺め黄蝶と縁に座す

幾重にも網張って待つ蜘蛛の鬼

一人居て物食う暮らし一日目蜘蛛のむくろを流しに流す

十月五日

高熱で寝ねず秋窓夜長し

黛玉の愁いも熱におぼろの夜

十月某日

「葬花詩」を読んで深まる秋を見る

コスモスの乱れ咲く野を帰る蝶

十月十七日

人のごと実のある椎の得がたさよ

十月十九日

秋深し落日の赤目にしみる

十月二十四日

秋空に空華桜の二三片

願い成り敬を保持して秋の夜

十月二十七日

秋風に帽子をとられ風追う手

孫の手は落ち葉吹く風制しえず

十一月二日

肉眼は視野健全と言われたが自らは知る心眼狭窄

十一月七日

銀木犀散らす朝に行き会うて

秋の気が天地を満たし身にしみわたり銀雪に心震わせきざはし下りる

十一月十日

託すほどの言葉生まれず行く雁よ

十一月十八日

人生の辛苦を老いて知らされる人は未熟な者として在る

意味成さぬ音声聞いて冬の闇

二百もの鳶木枯らしに舞い上がる

十一月二十六日

年賀状の片隅に泰山「天街」の牌樓の写真を入れ、句を添えた。

海蝶の一場の夢天の街

十一月二十七日 落葉の散り敷く布置に啓示見る

十一月三十日 老健で食う人々の小春の日

山遠く苦海の冬に響く声

意味結ぶコードも混じるこの世界

飛花いずこ桜紅葉の千々の舞

玄海を望み燃え立ち散る紅葉

小春日を駆ける幼児のいる世界

十二月二日 紅楼夢見終え時雨を聞きつ臥す

耳澄まし現<sup>うつ</sup>に暖を求める夜

十二月六日

この度は核磁気共鳴細君にしばし休めと胆嚢写す

十二月十四日

家の内に交々の事起きる暮れ

十二月十八日

行く年や半月仰ぎ窓に立ち手術の終わり待つ長い時

十二月十九日

鐘の音に冬の歩みを聞く朝

十二月二十一日

石段で「月の沙漠」を歌いつつ孫の手借りて落ち葉を拾う

祖母見舞う孫の楽しみ売店で飲み食うものを手に入れること

十二月二十二日

暮れの雨夜のしじまに降りしきり物皆洗うその音を聞く

(未明)

忙しい一日夜は夜回りで大声出して冬至を越える

十二月二十七日 超音波に影成し告げる存在は心の鼓動を既に始める

十二月三十一日 大晦日目覚めの床で巡る想

多事の年送り眺める観覧車





二〇〇八年 正月  
徐山亭 謹製



『ドゥイノの悲歌』

R・M リルケ

古井由吉訳

無花果の樹よ、すでにいかにひさしく、わたしは  
お前の結実を意味深く眺めたことか。お前は開花  
を無きにひとしく通り越して、早めに意を決した  
果実の中へ、人の賞讃の眼を惹くこともなく、お  
前の純粹な秘密を追い込む。噴水をひとたび  
地下へ導く管のように、撓う枝々は樹液を下へ押  
しやり、やがて樹液は眠りから、覚めることもな  
く、もつとも甘美な成果の、喜悦となり一氣にふ  
くらむ。まさに、大神が白鳥へ化するように。

・  
・  
・  
・  
・  
・

